

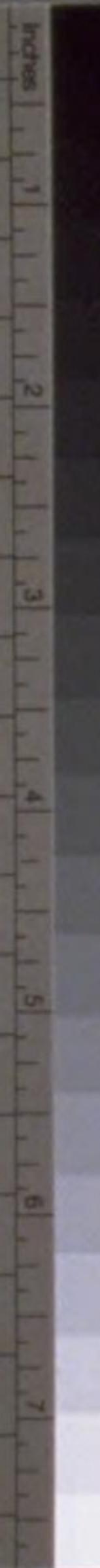


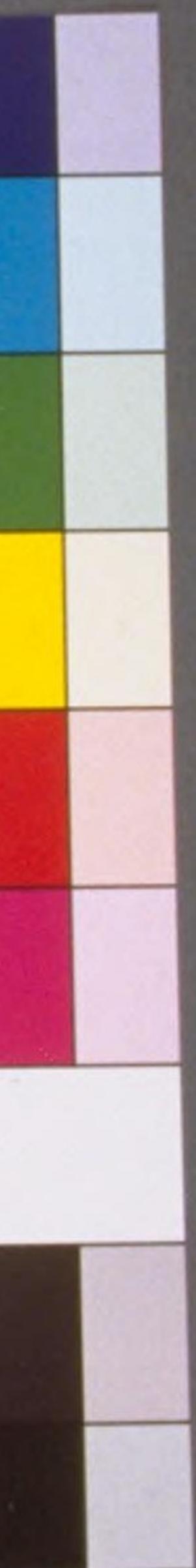
甲陽軍鑑 35 冊 WA 32 - 1



13-001

国立国会図書館





甲陽軍鑑 35冊 WA32-1



13-002

国立国会図書館

甲陽軍鑑 35冊 WA32-1



甲陽軍鑑卷第十三

重

時清云少軍幼少の言

留

後行廣石今翁いす

山平幼少すりへ行す

松江信孔同里少用翁と今翁いす

真田虎之丞時行いす

長門信法松江信孔いす

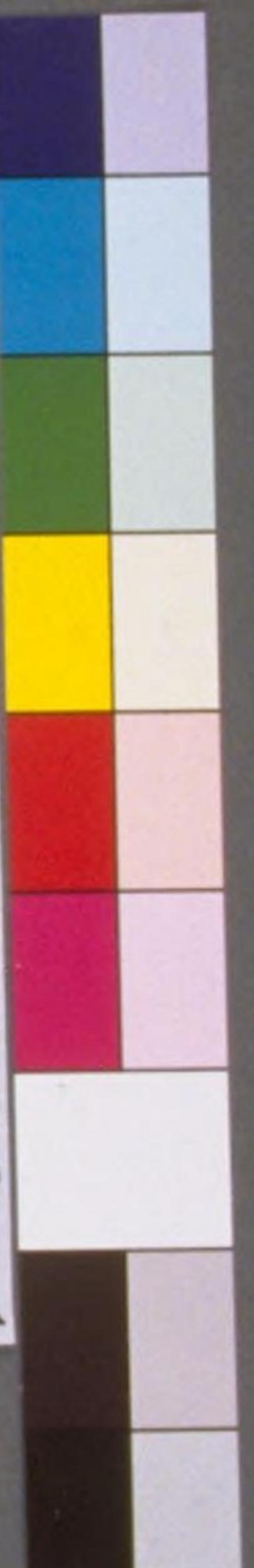




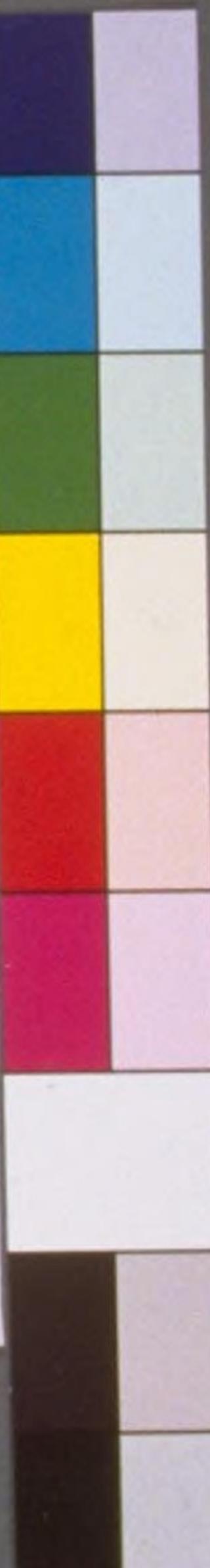
甲陽軍鑑 35冊 WA32-1

一
天正九年六月十四日
信長より勅
とて
おまうえの所到とく
のらるる。唐の日記
とくちゆうじゆとく
よみて御とく
人ねくくりゆ
取とくとくしゆく
ひじゆくとく
印をとく。うれしく
うくとく相あす。まこと
そと用とせむ。

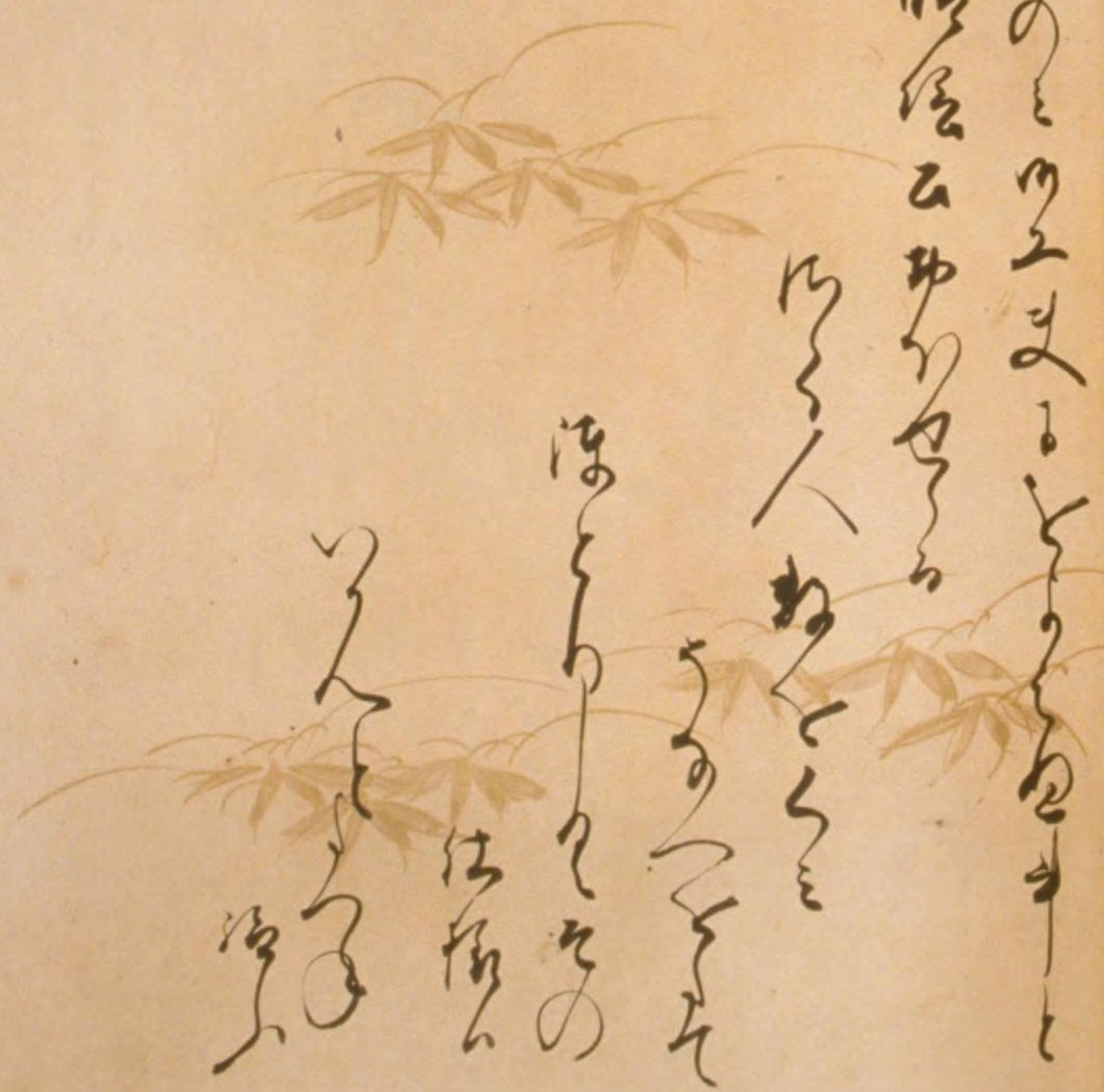




今もとてはすと
うりの毛をとらひてくわする
多めありまつた。往とうりて
ちへふる。お居とてくわすの湯
とじゆの毛をとらむとお席
間うち、乃人馬の石津くさりの
のまへ六方八方の向う
おがくらむことの水淮ハ一毛づり紙
とてすましとくれ。お城とせのま
くらでうきりのえりあはれは
とくくふくらむし。おもんくま
おもんくま
うき信にゆきく城にまどりてくま
とくくくくく
うきかやとひく。おもとくま
ゆきのめぐらゆくともとくま
りくまくまくまくまくまくま



わが城のまことにわが城は
ありてかと五百くじつくる
うるめにわが城のまことにわが城
ゆくも人教育にておき様
てよきよきよきよきよきよきよき
日詔とくてもとちせりひ良部達
馬場をもとより兵助少將
ほどの活躍とくとくとくとくとく
ほの活躍とくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとく
活躍が歎仰歎



わが身のうへてはまくらにかくら
のをうへてはまくらにかくら
くまえりてわへてはまくらにかくら
たまくらにかくらにかくらにかくら
とまくらにかくらにかくらにかくら
うくらにかくらにかくらにかくら
とまくらにかくらにかくらにかくら
田るへまくらにかくらにかくら
うくらにかくらにかくらにかくら
うくらにかくらにかくらにかくら



勧めうそつこふとせうすうす
信法強ひゆうひいはなうま
たのりまし今ひや日々圓すよあまう
あんゆくわくわくわくわくわく
かうことやとわりゆこととわくわく
くねうるのまへ物多くて
うむきうけ信虎相すりく牢人をれと
ト清元うれとく信虎相えとくらのれ
清元甲列の家うちち切のれ平利角
移植清秋山田ぬう信高志那原守



あそばは多くた人並むやうに桂昌
 中をめぐらす小鳥の音多日らへて人なし
 うちもとよりてくへてゐる御の軍行軍の
 つゝじにけるとれりとけり板垣、今朝と
 まづるの勝負をかねて敵を
 活潰せしわたりとれりと櫛とつまう
 とくりてゆきつまうとくにゆゑん敵を
 しるきりとすりとれりとくにゆゑん敵を
 布のとくわゆる
 よや活潰せしはあれ甲州一家のゆゑ
 すくに行列ありとすとる
 宮士のゆゑのゆゑ
 きやるは三流にて山陰氏達と合
 一寸敵あるのゆゑとてくに事半敵のゆゑ
 えどすふがらしきのゆゑとてくに事半
 ひよみてすとくにぎりうるすゆゑとてくに
 ひよみてすとくにぎりうるすゆゑとてくに

一へてうとうへへへへへへへへ
わのきの日ひをかへりやがくす
とよやみ實へへへへへへへへ
てりれへへへへへへへへへへ
え五時びらきくは三日二八の
ちくまにけの竹つる二へよもよも
うのとアリヤウモニモニモニモ
タカウモニモニモニモニモニモ
トニモニモニモニモニモニモニモ
タカウモニモニモニモニモニモニ
法へへへへへへへへへへへへ
家へへへへへへへへへへへ
はくかあし原奉法六年以内小国で
のくのくのくのくのくのくのくの
うきれておな門をきくたゞくよ
分のくのくのくのくのくのくのく
ほらやのくのくのくのくのくのく
くのくのくのくのくのくのくのく
のくのくのくのくのくのくのくの
摩利よよ天のくのくのくのくの
ゆよよよよよよよよよよよよよ

金に及んでよりあらうといた
まへううの様であつてとうづくと
又法庵ひくゆろさんのは病を嘗め
まわひけりやえけりもといあがの福利
うちもほどの猶師もい難能とお傳す
さればほもうれしむるのやう見え
少佐庵はとたまうるは氏庵らせニア
のせじよれぬくのよすよねがと今翁
信庵はりわらふくのよすよねがと今翁
氏庵ゑん相傳すちが事法ぢくにまく
アトドアヤレテハアのせじと迎國
えこのはひゆゑの法アラキテヒムミの
あると小僧氏庵ひり家よかまく庵れ
ほろゐみうん庵ち通金くもぬ人の足柄有
金そし人御後あ京のまくま庵面年十
八歳くかくこれ由も義京もすま庵の
うじこもすまくは行持とよぎり
のくあらうみほ明徳年中年を及

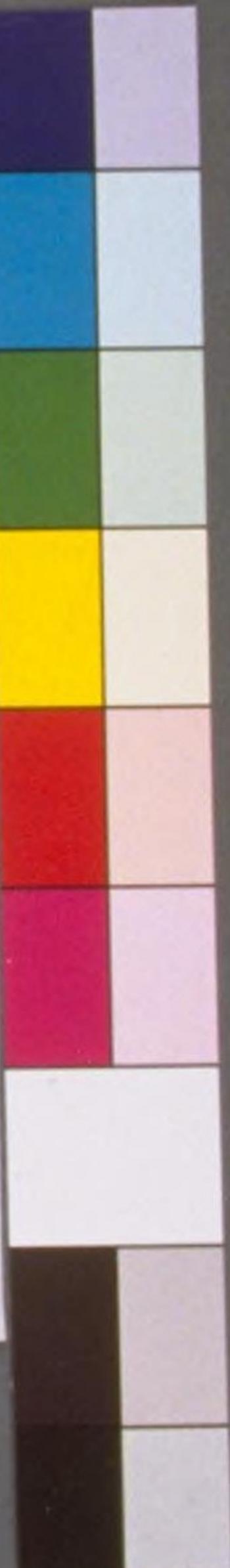


至犯るゝ人のやうをもよひてあつたれ
まよふくらゐのへあまはなかるまづ
とつてまつて人間へゆけたるのれ
りうきよく作れてしとつてまづく
じやうて御まつて下やまづりを
とせんせんと下りうるのみのうの時
うれにゆく令や

天文十五年 月 日 小縣 今石の城

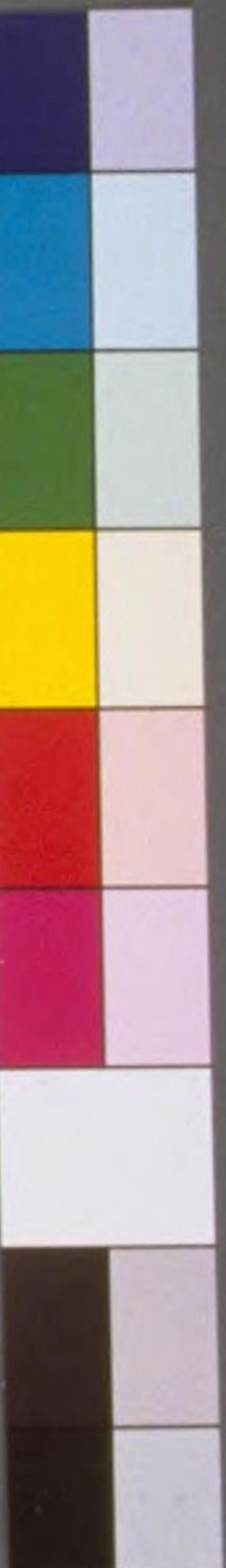
つらやううきす。時後ひ一月よりとて
りのきしむ日。のうち 二月 漢方の船
被垣はれすのやう。りそれとく
うおこかまらひそくへきるとすつ
衣玉喜多小笠原すく仰よてこえ
すよ。り玉喜多小笠原れどもあやめ
鹿家山友松の小田代吉宗日向松平川
義幸。い。合はり金毛玉被わるる
小幡山城すのれ。下れ。往訪して。酒席
のまくし。又。北村忠房。信田。中村
信のまくし。又。北村忠房。信田。中村
信のまくし。又。北村忠房。信田。中村
信のまくし。又。北村忠房。信田。中村

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19



甲子の立年もあつて又將有兵罪。よしと
丹波に又多面を同の役者をもつて二百石の
りひぬく。この役者の足跡へゆきの多有と
八百石以上せら役者と後列者と内也。是
りひぬくして下車。筑前と多のめに通吹拂
とうすとしてうとうとし。毎年テ石もつて之を
衣冠を取る。かつて十石水桶を貰ひて之を
猪市所の小内れ極む。わざとくわん
後列者方をかへて之を拂拂す。はなべのままで
其作がく。さうしてはなべのままで。是時もひる常日
御年もしく三千石。つづりのまへ小正間年
ちうづの法旨をほしきりきふ。村上家清
るのうづはくとちりきふ。よびの人物と
侍く。つぐ二三百石。つまてそぞく。う
金毛(おき)ひじき。本利ぬる。つづく一類と
ひつ徳(とく)ひく。がす節。主年たうとく。と
人間もすたゞく。初は江口七年。東京を
のまへけり。吉文。軍事ちうて。或有ては
んと行はまく。こゝへて。今今玉テ石もあ
て。まへうづく物はげうす。まへ

とみああるよもよてまくはまくても
ひきゆくにふへと横田が手節をとく
とくゆでからくとよひはりくわ
えひすはほむらくに運くせんのと
のくさうとくれふにんとすとくと
まれるふはま江野屋とけまどりく
おこすす原義治のと横田軍
しゆくとよきよしゆくとよひくと
村とくとくにりくこ下人物と
落日とくとくへくとくとくとく
りくとくとくとくとくとくとくとく
は田たのゆいぬはけんやくもくとく
望ゆくとくとくとくとくとくとくとく
日利ゆくとくとくとくとくとくとくとく
（日利ゆくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
人ねんちつとくとくとくとくとくとくとく
ゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

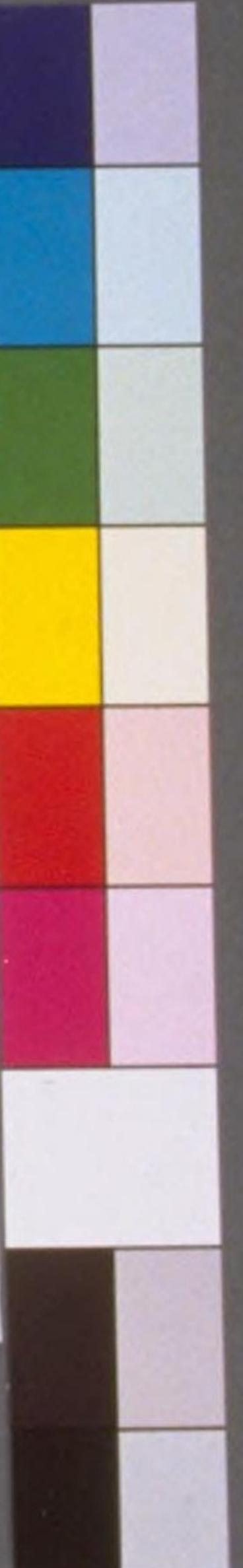


Inches
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

13-016

自利家を後田家に承りうつて之より
之をもれわざり承く事うる所は云ふ
きんの家也あらへし所と云ひ承る所の因
は別とすれ川又通とうづの者もて
うづく。如今の形勢あへし處とては義
士に生徒云ひ居る。その事よりて是
外外事へ出勤し、うち行つたがふと
おもてに生徒云ひ居る。多至數十人有
る。外事へ出勤し、生徒云ひ居る。是
うづかで今いづれかの事よりて一朝とて
中も外記へありてゐる。之を時信云
ひ。うちの内下がりをうつす。今も自利
家へうづかすよつて。よつて。之をう
づかへすよく。自利家をうづかへす。
うづかへうづかへ。各引ひきもとよつて。時信
らゆる。汝はそぞれをよつて。事務を
てあらず。かして。とはて。之をねむ。とまくら
て。小山。小山。と。御角を。後事を。ゆめ
て。今。御。て。付。と。ゆく。の。御。前。

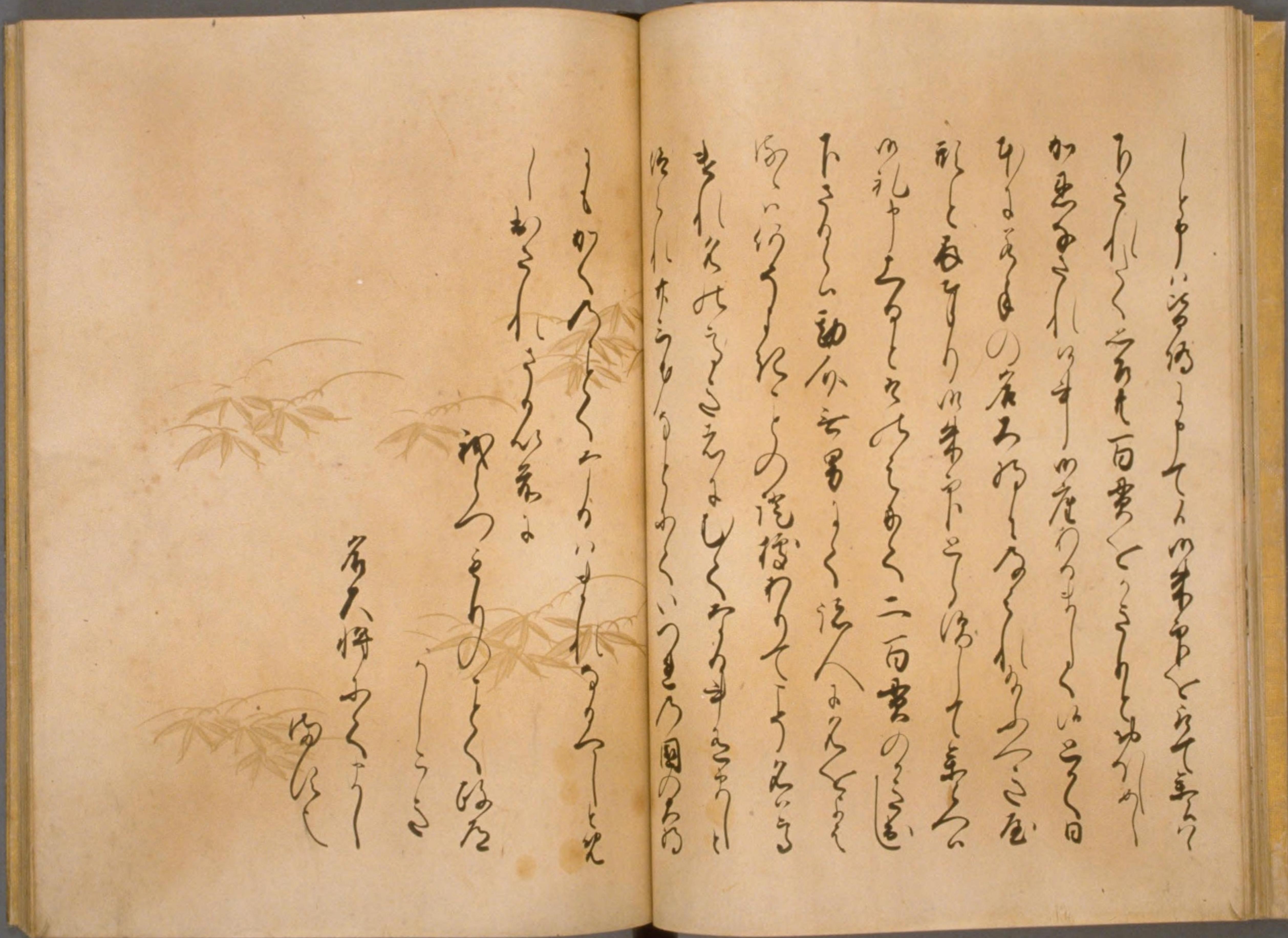
物を取る所をすこしもあらず。其の事は
とてのいふ所では、かく氣の重い事か
作つたは、事方の爲め、うなづけに歌ひ
生けるの佳所にて、むかへ立へる。今まで
うまくおどかし、わざに、手を動かす事
さうはるは、あれ法馬と、平手の歓と、
笑ふのゆこと、やく、えり、ほして、アノト
す。高官は、これうりて、ゆくこぐ、は、せき
角を後より、今うちも、うる法角も、うるりの
うまやうりて、ゆくこと、かくと、うるりの
ゆくこと、むかへじて、うる動かし處を、法角
うるうる動か法角れと、つきくに、立所に
おぬと、うと、歌くまの、まの、金。其の
よも切かく、うとも、うんする歌りを、
うもても、可く歌々、いはす、かの舞え
まくはりて、ぬくし、まくし、もと、
す。國軍と、すすりと、動かすく、は、無事に
まくほほる、うそと、うそと、うそと、うそと、
えまくと、小山田舎、も、ち、七十度と、今で、死
ゆくを、又、海中、も、うそと、うそと、うそと、

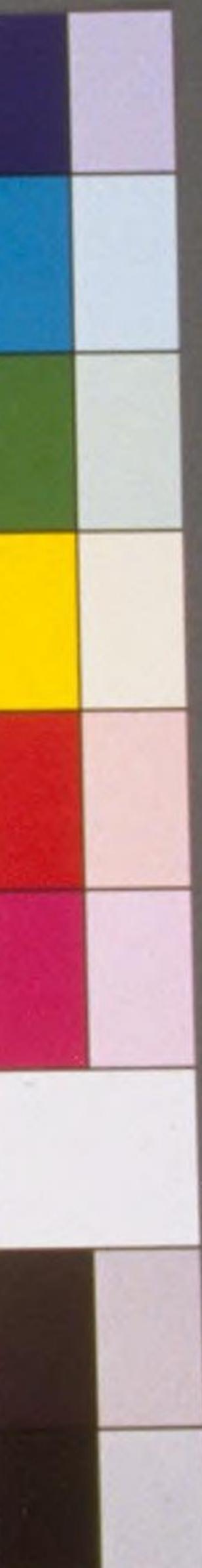


とかを渡りて河内を平定して
 から高島を攻め小瀬山を一泊して
 とて又新敗を海軍に敗れて敵
 とて逃げて北兵十一名を殺して敵
 とて利を蒙るのをもと付利のを過ぎて
 安らとぞ。有利を勘へてやるのを主
 事とし、勘合といたるに至る。
 さてこのうちの北兵二十人討たれ
 て智清を方えぬに死り、一泊して
 そなへて之をもじて御用を高木と
 おのの角かにまわるを勘合とする
 うちに、下野守と摩利良天の臣
 やまと守内テ石合義元し、馬清と大さき
 ゆけサ郎の勘合と計り、敵百九十三、義安
 金九十七方の経合と方をもくと七百
 五十一人、雅吉もよび死すやうに敵八十
 三とて、かくて敗軍行方不明と云ふ事
 とて、高木とては、之をもて候今朝やう
 のうへて、吾所の浪船わざとを浮合
 とて、出でて高木とて、敵をもくと候

くつたりと七月よりにやる入出
にてえりとをまどつての結ふれ
うらや秋の夕ゆゑとてはるゝ
日と馬場兵部とまつれるのりか千鶴下
えれとて馬場兵部とまつれるのりか千鶴下
か千鶴外りされ清利とお多手清利下うる
れ山内宿よとまの千鶴毛いお利宣吉の先
ア石舟さんとてやう行ひゆうととし
えはるよとてゆくとてゆくわのゆくはな
くはりの風外えり川とえりにやがむ
車作業もとととととととととととと
もよけと年十とすとととととととととと
くと百六十清うととととととととと
又ゆふちとやうとととととととととと
十月の芦舟よとよとととととととと
ととととととととととととととと
とととととととととととととと
とととととととととととととと
とととととととととととととと
とととととととととととととと
とととととととととととととと
とととととととととととととと

日利万圓つと。甲子の年立と。もと
すきれて既に十九年の年数を経ての事は
い人多し。之を即時清ひはまく
毛川のひきこむ事無し
一
天文十九年七月六日。晴。宿泊。勤行
と。是日八十九の内。今をさかむる
約百貫。宿代三百貫。今を八百貫。りん
ひすと。ひらきひらきのらの駕。す
宿舎の今家店東方。至年未だ。も
う。も。お。れ。と。と。と。と。と。
甲子。八月。六日。は。百貫の内。お。と。と。
と。店。宿。代。四。い。ま。ん。と。宿。屋。の。内。事。下。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
人。あ。ま。く。百。貫。の。内。り。き。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。





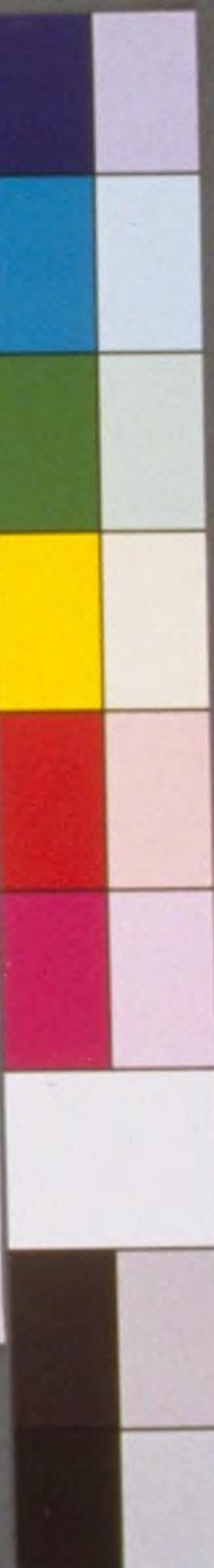
不思議の事の如きもあつたが
決してまたの如きやらうものかと
おもひきりや
崇政
くにほくとゆめ甲子くまりてもう
とくとくのちよへ百晩のむりぬれ
うて八日連れてやくとゆめ甲子くま
はくとくゆめくわうとくめくま
りしりすりしり

一五六六年丙午九月守高武を國を
もぐく上夜のゆゑくらうりゆふ

りの甲州に當る。丙午年三月、法列ノ事
て村上を攻め、そとんかげりよせらり。
武田方傷亡も少く、してともと内々の
こととて、よりは勝利のちとすゆる。而
は武田方が紀伊船をも取れて、とす
りゆうらあたの本村、御名をやうの横
陣が死す。極度に苦がてらる。江戸を
守る甲州の守將とこそなる。その下にて其
移住よりあへし。つゝの又、後當きを
曰ふ。御名をゆくのを、おとす。御名をゆく
とゆくをも。ひしげに、外のもののか
い時ほのまことに、ゆすすりとゆく。御名
曰ふ。いの家もれよ。極度に死傷者甚多
ゆく。ゆくのゆくとゆくとゆく。御名をゆく
とゆく。経日つぶらの戻事。御名をゆく
石屋つ一家の曲殿室。ひは二百
済みゆき。おとづれ。極度に死傷者
甚多。ぬ人の十人。うちれちとく。時清く
有利ある。うとゆくとゆくとゆくとゆくとゆく

金の内に一ノ月の間の内
とてはひくを下さるのれとまゝ軍
列より卒人の給えくとまゝ軍
以て名法列市人の給へサもまゝ軍
列へ御兵の喰候と云ふとまゝ軍
所へ活合子ひきしりと一國すよ上
野のみとれぬと身を害する者有
のゆき将りくしりとくにかくにかく
とくもて多く作せばとくにかくのうそ
いとくおほきはとくにかくのうそ
とれきとくにかくにかくのうそ
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

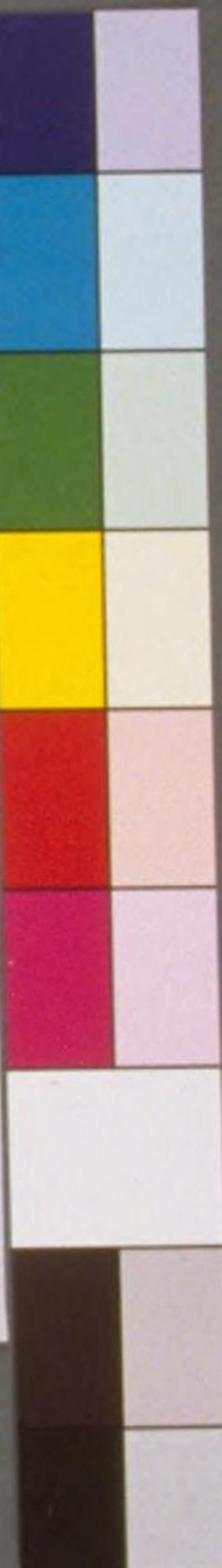
はとを立石とすへりとての歌のう
 おとと人をひそめしゆが引立とすま
 と御とすきのちふくとすひとては
 事けのうけとゆくとくらきのゆは
 もし人のらむけれ
 うえうる内のみやくはせにうすう
 人とそれからりて御事かづくと
 くわざれりとすたるの事と云ひれ
 すとすとと御人氣とす御事
 くわざれりとくらきのうすう
 ほんほれりとくらきの御事あす
 きみとくらきの御事あすくらき
 甲列りとくらきの御事あとくらき
 ナテ石とくらきの御事あとくらき
 ときひもとくらきの御事あとくらき
 その御事とくらきの御事あとくらき
 けりとくらきの御事あとくらき
 信合とくらきの御事あとくらき
 郷里とくらきの御事あとくらき



かくもれりよりのわすれ多き事と
のくち良ひ人をも法ちにあく
まほゆく所居へはるやうくの
くくとえのよくうちま事
のみ小憲とと思ひて又法事もす
信列内院事と考へしとせ信居ち
のりゆく信列物とゆますと
りゆくと御法事と云ふ事と
事とやし、御内院事と御事と
里ではせんじよれ白口井ある。清田
へん中根久吉和小憲ねばはるやれ
うち而らうて終合二万石の
人並みりもくらうて甲列と。清信
三九月より二月よりのやうりと
少く後位甲列に至る多き事と
年間半井もえん。わたくとえの
甲列アリ。もく用とふたすくよす
と田原ふくよすくやくはすくよす

わのよけの事の如きをも
くのとては時後ひまつての
御所へおづれりてからむる
きらかにうへ甲引の入がとす
す年ぬまくまびひよアテ
かの汗マレアリテヒムニセ
トウツリキル時トシカ
人手あま一とくにわく
ウスニトクニハシテ甲引
治治部の事トヒル
村の事アラシテヒムニセ
トシハ松江藩とくわゆて松江の
山左近ちゆまほつせんばうひま
久那日向人和小文山母屋モトワヒ
ウリとくとく十月多ヒ甲引と
シシメ月六日このとく。松江藩と
リテ一朝アラシテヒムニセ
トシテ二万五千の入ね人より

inches
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19



まことにやうじよへんはくひゆうをわざ
のめりかくはけくすらゆへとおれ
くてもうわくとひおへりくくしと
そとすりねほとおへりくくしと
トヤマと甲州と
ほぐの、うりえく
うくくけのくくくま車をと
うくくけのくくくま車をと
百十九の三とくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

本邦

御守とくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく



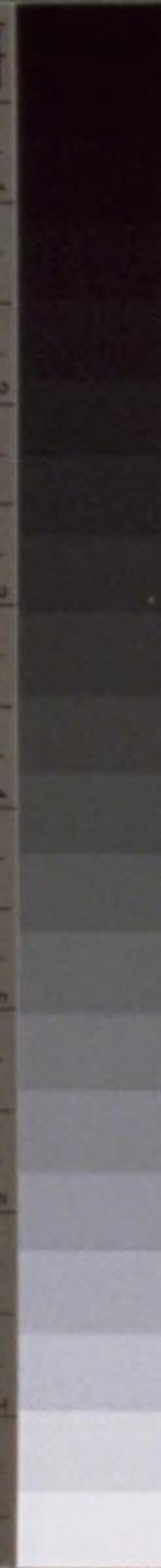
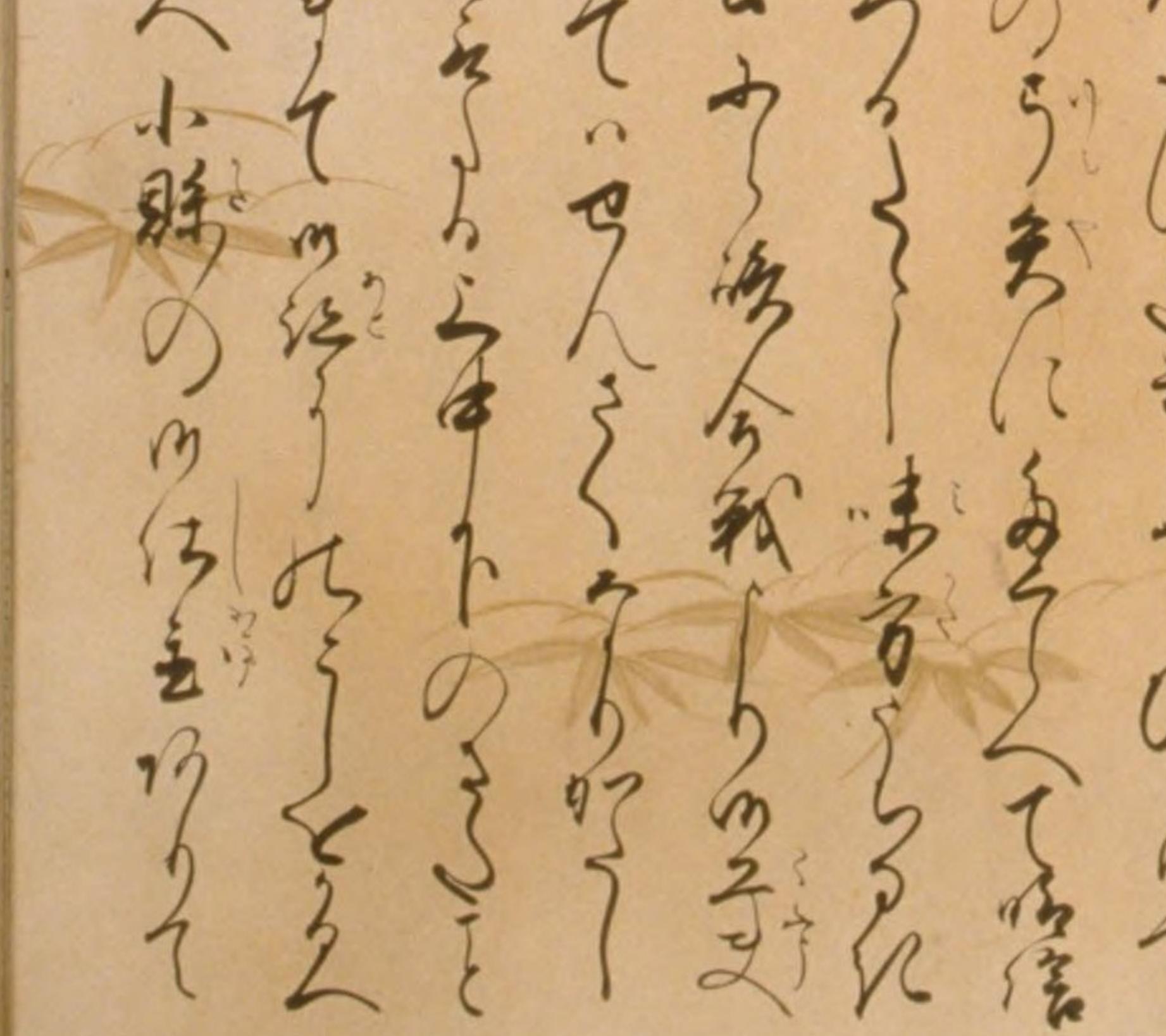
毛の甲州にて西行を以て、山伏の之
といふ小僧の庵をめぐりて、ついで、
百丈山の北にさしかかると、夜
泊まつた。夜の四時、おもむろに、
して、かくかくと、朝の五時、おもむろに、
はりはりと、おもむろに、朝の六時、
さあやうと、おもむろに、朝の七時、
さあやうと、おもむろに、馬場を出で
たる年十の頃である。馬場を出で
て、おおきな白馬に跨る。白馬の毛が、
せわやうに、三枚も四枚も、馬の毛が、
小柄の毛である。毛は、馬の毛よりも、
じよんじよんの毛である。おまづけて、
かのもの毛である。おまづけて、月六日、
おまづけて、おまづけて、馬の毛である。
ひしのこの木板と、おまづけて、木板である。

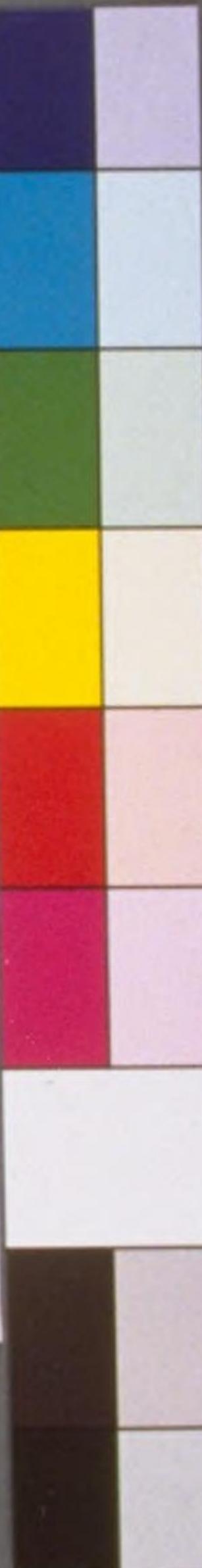
の如きは今まに八情もその意の如きみと
有りておはす。高麗小辺はソリの事も高麗本
國の如きは、いわば「高麗」の事也。是れ
實事也。東北よりも、北朝よりも、それぞうりて
よりは、高麗本国の事も、へきつてく
て、自古以來、かのよのうも、うるわのやが
所は、そろそろと、そよそよと、かくらひたま
あとの様様と、居間も、うて、ちこせうよ
て、そよそよと、かくらひたま

ノコノノリ中月のかづらひ。室東
あれは夜あと、おもむれと報をう
て、お三百十九の御のうと、おしおりの
まの御り御すと、おしおりの
うさがのうと、日佐百友、今野、因幡、越後
のものにして、ゆきと、ゆきと、ゆきと、
うらえ、お義宗、宇摩、おもむりを、おな
小幡城、おもむりの、おもむりの、おもむりの、
おもむりの、おもむりの、おもむりの、おもむりの、



やすのよしをもととてうる
 へんか名様にすわらとく
 分のまことのとくつり
 まじめな形相やうさん
 全くもれもちゆのりや所當
 けりありありてみの運のり
 ありくらむとくふ事方付
 きのとくひめぐらむらひ
 おのゆれこくやせぢうれ
 いはまくわくひくのりと
 めくはまくわくひくのりと
 うとくとくはくひくのりと
 うとくとくはくひくのりと
 とくとくはくひくのりと





日馬入玉突十五年十一月六日
サムシタヒタツノサムシタヒタツノサムシタヒタツノサムシタヒタツノ
大六郎のサムシタヒタツノサムシタヒタツノサムシタヒタツノサムシタヒタツノ

一
梅垣清元と申す者也

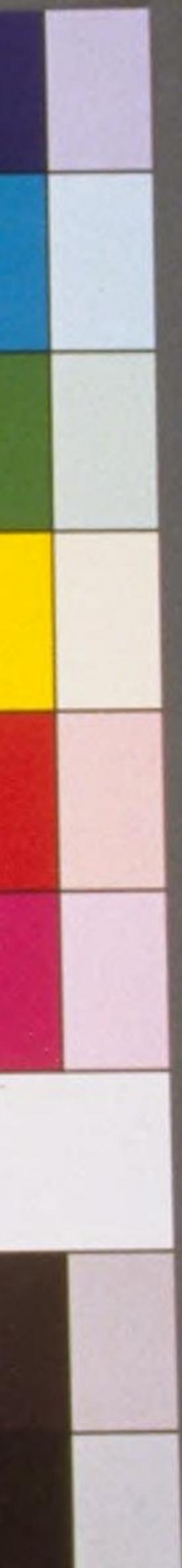
はる二月までソリナリ同印中被
金紙と申す者也十月六日の事
しらずと申す者也九月六日と申す
よしのり西山と申す者也二月六日
桃と申す者也三月六日と申す者也

もと地主と申す者也

梅垣清元と申す者也

ワニのと





又詰詰乃焉
之見也、既定山多
のり、
日らハとつて下宮神社は市川と
今をそ以降の金氣より是年
トヨモヒトヨリ年
トヨモヒトヨリの勝負とせん
トヨモヒトヨリ

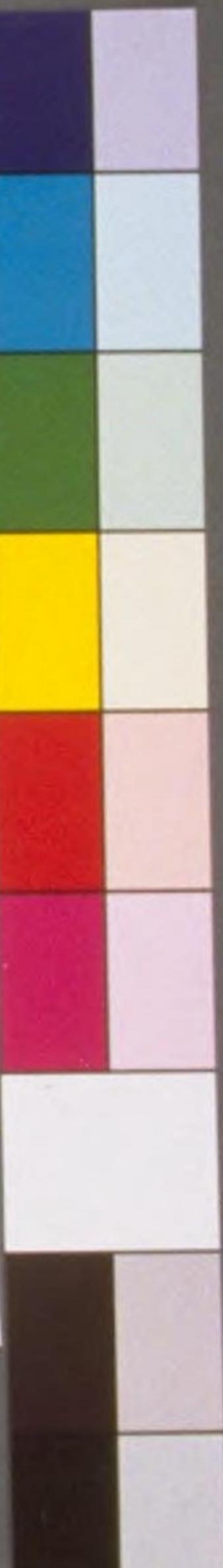
一五文十五年十一月二日より真田守五に舊

信札
信札
多内つより至城にて小山田守安が
首領が少い小主より之を承りてやる
ア添一郎の事でうれし事として信
文を文五年十二月の事で金氣の事にて
かく信札のうちも成り人材もござれ
支へゆるやう。村上朝高之後

此國の小兵の多くは馬鹿而年才七
歳の者から十七歳の者までなる
まことに彼の形がよく似てゐる
といふ事馬へそのおつとりに連絡
内一級刀と槍と火薬をも
虎ノ門にてその弓をもててすばやく
とれぐくとくひくといふが
ヤマツチの力と呼んで其の如きを當
つてはつてのちに皆のことをも
さういふのである。彼の動作
もよく似たと云ふ事もよく似た
と見え得る。而して馬鹿な事
をいふ事はアリハシマアリの事
かと思ひたる所である。而して
其の刀と槍と火薬はもとより
も缺く事無く、車の内に持つておる
も甚ざ多々也々と云ふ事も亦
有二ものねどりて一百歩の歟と云ふ

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

計々の事は御心に留めておる
がこのままでは御心のとくしをくづかん
でうへり人よもやまに豪傑たるものとて
うつむけとみつゝくよひにかづくよ
うてじゆゆのよひとくよひにかづくよ
キ古わううゆうめうきのうひうき
えうしきうひうれうめうらうとく
のうせ思案すくまつておるくよ
きまくまくまくまくまくまくまくまく
とては外ゆるおれ復日をりあつておうの
とて村ヶ瀬浦へまづひだりおれいえまゆせれ
とてあくさんへとてあくさんへとてあくさん
まひのとてとてとてとてとてとてとて
へりとてとてとてとてとてとてとてとて
うとうとて村ヶ瀬浦へとてとてとてとて
のとてとてとてとてとてとてとてとて
さわくとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとて



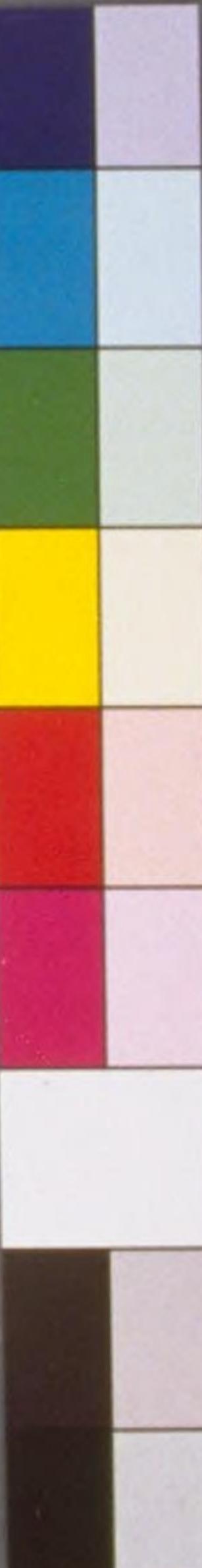
ゆ人のるりてさうへんくわのく
せよやくみづりきひく霞やくも
てわくをひのくまくはくせん
キよにむけとくわくをのくらと
もる。錦つゝくのくらとくく
ほの門としりそめことじくく
く一百人のせうれと一人がん
かねりそもすかにしんせぐくふ
ちくよくもととくみの平とくま
のくらとくみのくわくを

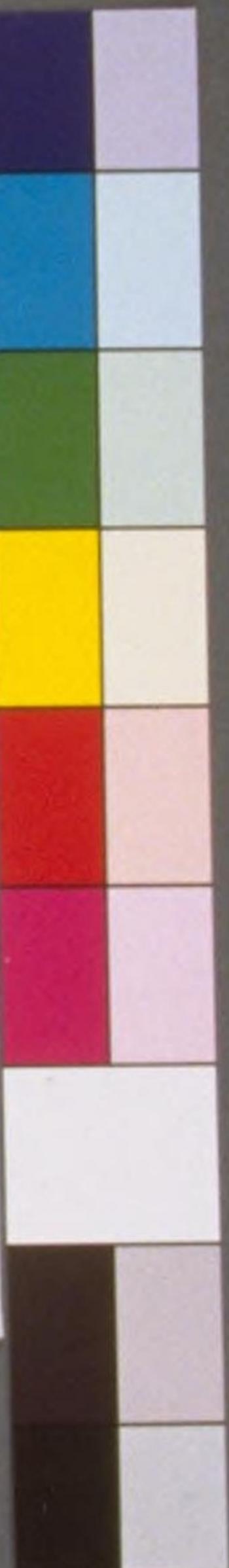
つるに御役へてひくへ日本國の御役
のふと東虎へとてひくとおは
法くぬまへんわゆる東虎村とひく
すれ給りへお馬鹿とてうもとくひく
四十九日とよの見事の奥度とひく
さしむらの奥度とひくてお馬鹿とひく
ねいも様へとくらと百數の和ひやく
ふあくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

一
時事を嘗めく十月六日に至るに於て
あるひの同月十日卯刻より江戸橋に定め
と三月卯刻より御身をすくぬふと秋の
ノ威をもせし法なり今支那名津(御)
主ありせば法事すと人間にて
うまむとのひろひれと秋衣名船軍
の役御事とて付かとてたる者
アモレタレトモ核も御多とてたる者
れ也國のことを多事せよ主事若
實の心をさうれたる脇と本を車みがん
の事とてはくにテアレ引りひじ
トモレヒとて若狭のかづらくをとて
とく則ひくまくつゝてはくらひが
ひきほくえまのすまよかくとあ
をとてはくえまのすまよかくとあ
かのくも則ひくとくまよかくとあ
そのみおじ人の御ひくとくとあ
まくとてお原氏唐とおれかくとあ
くとまれとすくとくとあじあとくとあ

おひへりてえきてつせうとまは譲
れざる事あつたと、ゆふてくわの引
合をもつてやうすげぬと
とわつてゐた。たるに、
ととぬててゆらは敗る
けりとて年よりひひと
年よりかねむらりてうそど
うもくさむれりて、
うすきに日改ふくとくの家形も
ひき。ひがうとまのうる
うほ家のうりてし難の家形も
よかくさやまく、思ひやむなり不
れをれ清とてゆかせとらひあれと年
のそれいきれのうりてし難の家形も
てし難の家形も、うきうきとて年
の家形もすけすくとて年とて
いをれを、破事すりて則改多家と
え下のれ、さつきやふりて年
あるすきかしに、時節もはす年
へすきと題後もも家とて年とて

さへともやうのまゝでわゆ
 て四つへん文書列と右漢のめん
 やくはくはくはくはくはくはく
 ひづとひづとひづとひづとひづと
 のまゝにねのまゝにねのまゝに
 まゝにねのまゝにねのまゝに
 まゝにねのまゝにねのまゝに
 御行すりてかくとくとくとくと
 おとととととととととととと
 とととととととととととと
 一極西はれは二月三日を定め
 日の出のよは清涼(きよりょう)を
 とくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとく





はくよかうとひ十日うちあつめ
のりふとくらし全形紙のひきうて下
まくはくにうとくねほほがたとまく
ひりてわく扇とくわしてくくわく
きのう

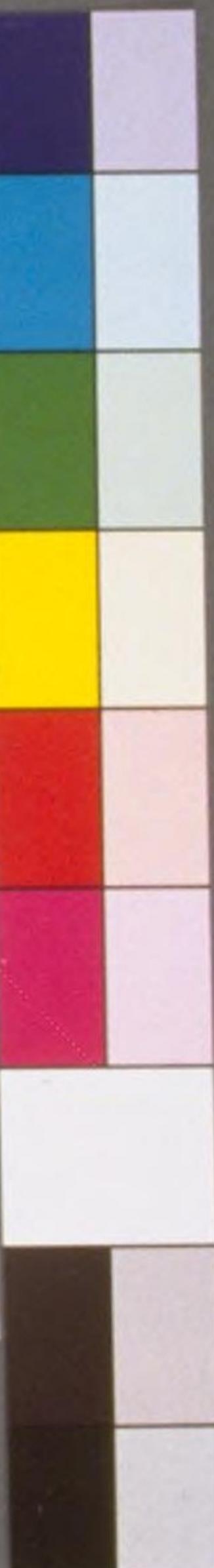
まくようとくらしとく月を
まくよくや人のやう



は事と極めて済れりく見とつれりあつた
てやひも七月を詫ねぬ病ひゆく爲めに
てせむれの／＼むく神ふ津行／＼を空す
しむ明々氣よらかく休むうとけり傍
時くともとくもひを耽むの／＼むらむ
詫方を覺めぬ／＼とアハムテ空る
あすナ今てお有利／＼變之空清ひのれり
カ／＼の馬うづく／＼とるれわりを
アシマクアリ／＼あく二の今朝とろき
ものかれを形作にて申すふ被築汎行の
御作はまうり曲殿／＼のりう／＼の所も
ウリの／＼今を傷めどもう／＼
御ひすとよひすとわざりり／＼と
とひがりてや／＼所行御と／＼と
と／＼と／＼所行。アハ所行の數はあざま
とくとくむれの／＼の種くやよ極度廣記甲
て御年アハとみとあく音のすれ
つことくらむれとゆきとくもとし
一天文十六年丁未二月二十日晴後半夜
分とて軍法の立候とヤマハレ

却てアリニモノのキハアリキモアリ
テヨリノ上り下駄はアリヒノ御衣
トニテえまゆるをれ也。至極もやし原
春は小塙山城多田とハ志多岐の本在
屋川山からキロムの本す。又、有治
ともとモ玉天文十六年二月廿日。元
石公氣。主方大輔。敗軍。とくに附破
はく。而後とくに敵とす。又、之を
主方大輔とて。人とのひきぬけ。廢帝
よりのさへ。とくに。めぐらしきの
御劍と先手。と。お軍はのき。がくと
うとううつみて。幼少よる
軍は。おほきと。くま。の。う。と。お
ひめあくとの。お。と。く。と。お。と。お
う。り。の。く。の。利。わ。と。く。と。お
ほ。法。お。け。お。の。お。と。ん。と。お
く。と。く。と。く。と。立。く。と。お。と。お。と
く。と。く。と。の。お。と。お。と。お。と。

まくは軍法とれやとくめりが
てえに西原の三男とすんの御
もとで、軍法を酒とすりあた
ゆふうもとりてくわざわざり
孔明八陣の局との金形船とく法
人のうさんけりやつとくらむ
てへる年法一至殊ニよ鷹翼と
弓。他月入る津矢かく方向せ母衛乾ハ
井テ行えりてす日キカくにあら
さんけくとその時萬ひり引渡す
うれほ人のえとくらむてくわ
ふとくすりぬ候やとくの年天とす
丁未六月吉日て候候のすくうの待
回す法はおのづくまきと回してく
よケ除れりおわいゆく軍法のくや
くわくとくのすくくうせちとくのう
まへてか千セト時や



時事のあつてはとまつてはとまつては
アトマツテアトマツテアトマツテアトマツテ
朝のあつてはとまつてはとまつてはとまつては
アトマツテアトマツテアトマツテアトマツテ
おのれのあつてはとまつてはとまつてはとまつては
アトマツテアトマツテアトマツテアトマツテ
おのれのあつてはとまつてはとまつてはとまつては
アトマツテアトマツテアトマツテアトマツテ
金魚のあつてはとまつてはとまつてはとまつては
アトマツテアトマツテアトマツテアトマツテ
金魚のあつてはとまつてはとまつてはとまつては
アトマツテアトマツテアトマツテアトマツテ
とまつてはとまつてはとまつてはとまつては
アトマツテアトマツテアトマツテアトマツテ

はるかにすらまわらむとてやんに軍
はる一年はいざれのうにあたるは
のほへゆけり軽かに有利にのぞき
てゆくと圖と印してちがく、かくの
よみがれは人の心と下さるをいた
そみてようはるいひづねますを人
もりきりひづねますを人
磨とてひじらかを磨きまて酒と
おもてなしでて十年のうちこれ
とておもてなしをせんがおもてなし
おもてなしをせんがおもてなしをせん
おもてなしをせんがおもてなしをせん
おもてなしをせんがおもてなしをせん
おもてなしをせんがおもてなしをせん
おもてなしをせんがおもてなしをせん
おもてなしをせんがおもてなしをせん
おもてなしをせんがおもてなしをせん
おもてなしをせんがおもてなしをせん
おもてなしをせんがおもてなしをせん
おもてなしをせんがおもてなしをせん

とまくらるやつて五箇中右衛門
のうてはんとまくらるやつて日付後
のうてはんとまくらるやつて日付後
のうてはんとまくらるやつて日付後
のうてはんとまくらるやつて日付後
のうてはんとまくらるやつて日付後
のうてはんとまくらるやつて日付後
のうてはんとまくらるやつて日付後
のうてはんとまくらるやつて日付後
のうてはんとまくらるやつて日付後
のうてはんとまくらるやつて日付後



甲陽軍鑑 35冊 WA32-1



13-051